



敏腕修理人

児玉 善一郎さん

●メルセデス専門修理工場・セントラルオート

セントラルオートの代表を務める児玉さん。気さくな性格で、ユーザーの立場で整備の相談に乗ってくれるのが嬉しい。一般整備はもちろんのこと、ATのオーバーホールも得意。愛車は94年式のE500。



推薦する人

三浦 典雄さん

●Mercedes-Benz E500 (W124) に乗る

これまで数々のメルセデスを乗り継ぎ、現在もW124のほか複数のメルセデスを所有している。空冷ボルシェも3台ある。児玉さんとの付き合いは5年。今では、所有しているメルセデスは全て児玉さんに任せている。



名車W124型E500に乗る三浦さんが頼る修理工場がセントラルオート。20歳代の頃から輸入車に乗っている三浦さんは、これまで数々の修理工場を訪れてきた。その中でセントラルオートを選んだ理由、そして長く輸入車に乗ってきたからこそ分かる修理工場選びのポイントを聞いてみた。

文=GERMAN CARS 撮影=桜井隆幸 協力=セントラルオート

「私は人と人との関係を大事にしています。だから、専門の工場やショップというのはマンツーマンで会話できるし、私のクルマだということも分かった上で整備してくれるのがいい。でも、担当者と話が合わないこともあります。人間だからそれは仕方ないと思うんですが、合わない人に大切な愛車を任せることはできません。これまでの長い輸入車ライフの中でも失敗したことがありますし(笑)。でも、その勉強があったからこそ見極められるようになったのだと思います」

「今、メルセデスは数台所有しているのですが、確かW202型のC240を妻用に購入した時が最初だったと思います。工場に行った時はW124などのメルセデスマニアが集うようなところで、Cクラスの点検整備なんて持ってきたりダメなのかなって思っていたんです。でも、児玉さんと話してみたら、そんなことは全くなくともフレンドリーで入りやすかった。私はクルマのメカニズムにはあまり詳しくないんですが、専門的なことでも一生懸命分かりやすく説明してくれるんです。部品についてについても丁寧に説明してくれるから、この人に任せておけば間違いない

「輸入車ライフが長いだけに工場選びで失敗したこともクルマという機械を直すのは人間。だからこそ、店構えや看板ではなくメカニックの人の柄を重視すると話す三浦さん。20代の頃から輸入車に乗り始めて、様々なクルマを乗り継ぐ過程でたくさんの修理工場を見つけたという。

「見極めるといっても、何か基準があるわけではない。クルマや整備に対する考えが、自分に合うかどうかということですね」

そんな三浦さんが乗る94年式のE500を任せているのが、セントラルオートの児玉さんである。最初に話した時の印象を聞いてみた。

三浦さんが / セントラルオートを推薦する理由は？

丁寧に説明してくれるから安心して愛車を任せられる

「専門工場は敷居が高いというイメージがあります。セントラルオートさんに初めて行った時は私もそう感じていたんですが、児玉さんと話してみるとそんなことは全くなく、むしろいろいろと相談できる工場だと思いました。メルセデスに対する経験が豊富なこと、高い技術力を持つことは言うまでもありませんが、ユーザーの立場で整備の提案をしてくれるのが魅力。丁寧に説明してくれるので、安心できると思いますよ」

担当メカニックの第一印象は？

メルセデスが好きというのが伝わってきた

「私と同じでメルセデスが好きなんだなあというのが、話していて分かりました。ただ話しやすいというだけではなく、どうすればクルマが良くなるのかということを生懸命説明してくれたのが、今でも印象に残っていますね。あとね、いい笑顔(笑)」

1994y Mercedes-Benz E500 (W124)



ネオクラシックの域に入りつつあるW124型E500。以前よりも味わいが深まり、趣味車として楽しめる絶好の時期に来ている。塗装のコンディションも良く、大切に扱われているのがよく分かる。

機能性を重視したシンプルなインパネ回り。ATはダイレクトなフィーリングが魅力の機械式4速を搭載している。



マフラーはAMG用をチョイス。機能面だけではなく、見た目の相性も抜群だ。



劣化が目立ってきたルーフライナーは、高級素材のアルカンターラで張り替え。



アルミホイールは18インチのユーロ6。ブレーキはプレンプで強化している。



大きく張り出した憧れのオーバーフェンダー。ホイールはスパーサーを使ってツライチとなっている。

いまだフリークの心を捕らえて離さない名車 E500

ないなど、最初に話した時に感じましたね」

その後、三浦さんはE500を購入。このクルマについて簡単に紹介しておこう。500Eは当初、ボディはメルセデスの工場である程度組み上げられ、足回りなどと合わせてボルシエの工場に送られて組み立てられていた。日本には92年に導入。93年になると生産の拠点がメルセデスの工場に移され、排気ガス規制の問題もありエンジンのチューニングを変更。94年にマイナーチェンジを実施し、ボンネットやトランク回り、ウインカーもオレンジからクリアタイプに変更されている。ここから後期型となり、名称も500EからE500に変更されている。

三浦さんの愛車は94年式の後期型。大きく張り出したオーバーフェンダーは高性能の証であり、直線的なデザインが今も飽きさせない魅力を放っている。足回りを見るとブレーキにはブレンプを奢り、アルミホイールは18インチのユーロ6を装着。マフラーはAMGをチョイスし刺激的なサウンドを響かせている。レベライザーが備わるリアショックはノーマルだが、フロントにはビルシュタインをチョイス。インテリアを見ると、ルーフライナーがアルカンターラに張り替えられ上品なイメージを醸し出している。これらのカスタマイズは派手過ぎず、機能を追求した大人の雰囲気を持つE500に仕上げられているのが好印象だった。

専門的なことでも
分かりやすく説明してくれる

三浦さんと児玉さんの付き合いは5年になる。今ではメンテナンスの

今でも飽きのこない直線的なボディラインを持つE500。根強いファンに支えられている名車である。



セントラルオートに依頼した主な整備

点火系、冷却系、燃料系と基本的な部分は全てセントラルオートでメンテナンスを行なっている。あれこれも交換するのではなく、消耗品の寿命を見極めた整備で快調をキープできているのは、これまでの経験によるものだろう。AT もオーバーホール済みだ。さらに、ウォーターポンプをAMG E50用にするなど、M119エンジンの水温対策も行なっている。取材中、夏に向けてのメンテナンスを相談していたのが印象的だった。



太いトルクでパワフルな加速を実現する名機 M119 ユニートを搭載。きっちりとメンテナンスを行なったら大きなトラブルなく乗れているとのこと。ツボを抑えたメンテナンスで快調をキープしている。



AMG E50用のウォーターポンプを流用している。冷却水の循環をより効率化するために装着したものだ。



熱量が多いV8エンジンなので、ラジエーターなど冷却系のメンテナンスはきっちりと施されている。



ハイテンションコードは永井電子のウルトラをチョイス。社外品のアドバイスしてくれるのも嬉しいとのこと。



デスピキャップ、ローターといった点火系にも手が入っている。整備は全てセントラルオートにお任せだそうです。

「以前、C36を別のお店で買ってきただけなんです。それをいじって遊ぼうと思っていたんですが、そのクルマが本当にダメで……(笑)。それを直す前提でセントラルオートに持ってきたんですが、児玉さんからもやめた

全てを児玉さんに任せるとの信頼関係を築いている。「専門の修理工場は修理ありきで話をしてくれませんか。例えば、シヨップと言われるようなところで担当者と話をしていただくと、パーツやクルマの買い替えといった営業っぽいところが会話の中にチラッと入ってくる。仕事ですから私としては構わないんですが、児玉さんはそういうところが一切ない。ただ、このクルマを良い状態で楽しく乗るためにはどうすればいいかというのを本当に細かく分かりますよ。しかも熱く話してくれるんですよ。」

愛車を任せて良かった!

セントラルオートのこんな対応が嬉しい!

的確な診断でATを直してくれた

W 202のATが変速不良を起こし、いろいろな工場で見積もりが60万円という見積りばかりだったという。そこでどうにかならないかと児玉さんに相談したところ、バルブボディの洗浄と基板の交換で直るかもしれないから

やってみよう、って言ってくれたそう。結果的にトラブルは解消し、費用も当初の半分以下で済んだのがとても助かったとのこと。ATやエンジンの重整備を得意とするセントラルオート。多くのユーザーに支持されるのも、こうした的確な診断と技術力にあるのだろう。



(上) ATのオーバーホールは児玉さんの得意分野。業者からの依頼も多い。(左)写真はE500のAT。これもセントラルオートにてオーバーホールを実施。

「エンジンとミッションを組み直していただきますから、どんなトラブルが出るほうがいいんじゃない? って言われたいくらいポロポロだったんです。でもちょうどその頃E320Wゴン(S124)のワイドボディがあつて、だったら載せ替えてE36Tを作ろうということに。完成したという連絡ももらってクルマを取りに行ったら、2週間はずいぶん遅いって言われたんです。エンジンの載せ換えなんて何度かやっていた工場なのに、すごく慎重な姿勢だと感じました。クルマが完成したから渡しておしまいではなく、メカニックとして安全に走らせるのがプロだと思いますし、こういった対応をされると安心できますよ。もう2年くらい乗っていますが、トラブルは全くありません!」

「仕事に対しての慎重な姿勢というのは、メカニックにとって重要なことだと思ふ。三浦さんもこう話す。「私は金属加工の会社をやっているか予想できない。オーバーホールをしてる時もそうなんです。分解して組み上げて、それをクルマに装着してエンジンをかける時が一番緊張します。何度もやっている作業なんですけどね。でも、E36Tが何事もなく本当に良かった。どこまでやっても完璧というのは難しいと思ふんです。言い訳するわけではないんですが、エンジンスワップのような大掛りな作業になるとどうしても慎重になっちゃうんですね。三浦さんに迷惑をかけるわけにはいきませんから」

仕事に対しての姿勢を見るようにしている



E500 ユーザーである三浦さんに児玉さんの印象を聞いてみると、専門的なことでも分かりやすく説明してくれるから安心できるとのこと。信頼できるメカニックがいることは、W124・E500 を乗り続けていく上でも重要な要素だ。

「技術や知識はもちろんなんですけど、ユーザーの立場で丁寧に説明してくれるのが嬉しい。あと、修理が終わってクルマを引き取りにいった時に『調子いいから』って笑顔でクルマを渡してくれるんですね。ちょっとしたことなんですけど自分も気持ちがいいし、もちろんクルマもしつかりと直っているから嬉しい。仕事に対する姿勢や対応も含めて、児玉さんは頼りになるメカニック。彼がいるからこそメルセデスをより楽しめているのだと思います。でも、ちょっと褒めすぎかな(笑)」

「私ほそれで評価しようとは思いません。むしろ、その後の対応のほうが大変であり、そこを評価するべきだと思いますね」
修理工場に対する考えは様々なあると思う。三浦さんは知識や技術だけではなく、機械という性質を理解した上でメカニックの仕事に対する姿勢を重視しているのだ。
「私はメルセデスとポルシェが乗らないと決めているんです。ポルシェは行きつけの工場があり、メルセデスはセントラルオートがあります。主治医が見つかった今では、万全の体制でドイツ車ライフを楽しんでいますよ」
今でこそ充実したカーライフを送っている三浦さんだが、主治医を見つけた頃にはたくさんの紆余曲折があった。けれども、そのおかげでメルセデスを任せられる児玉さんに出会い、クルマも快調をキープしている。三浦さんは最後にこう話してくれた。

メルセデスの知識や技術だけで選んだわけではなく 仕事に対する姿勢や考え方に共感できたことが大きい

——三浦 典雄さん

んです。自分で工場をやっているから、職人さんを見ればどの程度の仕事ができるかというのが分かる。メカニックも同じですよ。金属を触る職人同士の空気感や仕事に対する姿勢が、私にも伝わってくるんですよ。だから、信頼できる。

して、これでバッチリだと思ってても次の日にトラブルが出る場合があります。金属加工の仕事をしているからかもしれないが、機械ってそういうもんだと思っています。だから、仮に一度そういうことがあったとしても、私はそれで評価しようとは思いません。むしろ、その後の対応のほう

「私はメルセデスとポルシェが乗らないと決めているんです。ポルシェは行きつけの工場があり、メルセデスはセントラルオートがあります。主治医が見つかった今では、万全の体制でドイツ車ライフを楽しんでいますよ」



屋根付きのガレージに保管された数多くの入庫車両。ユーザーにとって大切な愛車を気遣ってくれるのが嬉しい。



エンジンやATのオーバーホールは得意分野。高い技術力で本来の性能を取り戻してくれる。

広々としたウェーティングルーム。週末になると引き取りのユーザーや整備受付などで混雑するので、事前に電話をしてから訪れるようにしましょう。



工場の前の通りにあるセントラルオートの看板。これが目印になる。気になることがあったら相談してみよう。



FACTORY DATA セントラルオート CENTRAL AUTO

- 住所：埼玉県八潮市八条 1179
- ☎：048-930-6800
- URL：<http://www.central-auto.net>
- 営業時間：9：00～18：00
- 定休日：日曜日・祝日

クラシックから高年式モデルまでメルセデス・ベンツなら何でもお任せの修理工場。基本的な整備はもちろんのこと、ATやエンジンのオーバーホールといった重整備、エンジンスワップといった改造も得意。AMGなどのチューニングカーのメンテナンスにおいても豊富な経験を持っており、高い技術力で数多くのメルセデス・ベンツを救っている工場だ。代表の児玉氏と統括マネージャーの江澤氏を中心に、経験豊富なメカニックたちが日々忙しく作業しているのはユーザーからの信頼の証だろう。